

浄土

monthly JÔDO

2014
January

1



法然上人鑽仰会

2014
表紙のひと

花 写



芝崎純子

撮影 Keizo S.

ヨーロッパフラワー連盟講師資格を取得し、
2007年から東京・目黒白金台の自宅でフラワーサロンを主宰。
生花やプリザーブドフラワー・アーティフィシャルフラワーなど
ヨーロッパスタイルを基本のLessonも開催するかたわら、
フラワーギフトアレンジを提案。
特に、仏事の供花を扱うブランド【花写】を立ち上げ、
生花に特殊な加工をして長期保存できる。
プリザーブドフラワーの仏花ギフトアレンジに定評がある。
墓石用のアーティフィシャルフラワーのアレンジや、
仏壇の供花は、
一人暮らしで水替えが大変という年配の方々からも人気で、
手元供養で小さな花のアレンジを添えるのは、
毎日の供養の際、
遺された者の心に穏やかさ優しさを与える、という。
法事やお盆、お彼岸など、
また、お悔やみのフラワーギフトとして注文も多く、
いま各界注目のアーティストである。
花写 <http://www.ca-sha.net>

浄土

2014/1月号 目次

法然上人の教えは「念仏為先」.....	阿満利麿	2
会いたい人 中村扇雀さん（上）.....	関 容子	12
響流十方	林田康順	20
連載小説 渡辺海旭	前田和男	24
江戸を歩く	森 清鑑	30
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48

表紙・表紙裏＝2014「浄土」表紙の人 【花写】芝崎純子

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人の教えは

「念仏為先」

阿満利磨

法然上人の教えは「念仏ねんぶつ為先いせん（本）」に尽きる。しかし、なぜ念仏がすべてに優先されるのか、また、その念仏の実践が私たちの暮らしにどのような意義をもたらすのか、については、現代の念仏者の間で、必ずしも共通理解が得られているとはいえない。

その理由は、まったく私見なのだが、法然上人の仏教がいわゆる三大法難をもって歴史上海沈したと認めるかどうか、にかかっているように思われる。

もちろん、こうした見方には賛成しない人も少なくないであろう。なぜならば、その後、源智や弁長をはじめとする門弟たちの努力によって、法然上人の教えは守られ、浄土宗の再興がなされた、と考えられるからだ。

しかし、私が問題とするのは、三大法難後に再登場する浄土宗は、時の権力との妥協・庇護によって実現したという歴史を経ているという点だ。同じことは、法然の門弟であった親鸞を開祖とする本願寺教団の成立にもあてはまる。親鸞の本願念仏の理解と、その曾孫・覚如にはじまる本願寺教団の教学との間には、大きな隔絶がある。

繰り返していえば、現代、一人の念仏者として本願念仏の可能性を考えると、法然上人の教えは一度権力によって滅びている、という事実に思いつく必要があるのではない。つまり、弾圧後に生まれてきた教団の教学のなかから、本願念仏の意義や可能性をあらたに見出すことはむづかしいのであり、ありていにいえば、むしろ、教団の教学とは自由な立場から、法然上人とその直門弟たちの著作、語録を読みぬく努力のなかにしか、法然上人が掲げられた「念仏為先」の真意義を明らかにする道はないのではないか、ということだ。

私がこのような考えにいたったのは、少なくとも二つの理由がある。一つは、法然上人

の教えられた「念仏為先」は、けっして政治権力との妥協を肯定するものでなかったということ。二つは、いわゆる「浄土宗」や「浄土真宗」といった教団成立後の本願念仏は、それぞれの教団に都合のよいように変形されていて、法然上人の説かれた本願念仏の姿を正しく伝えるものではないと私は思うのである。

*

第一の問題について。

「念仏為先」は、たんに個人の心の持ち方において、いつでも念仏ができる状態が確保されている、ということにはとどまらないだろう。「念仏為先」とは、暮らしの基準を念仏におく、つまり、念仏に象徴されている阿弥陀仏の慈悲を暮らしの基準におく、ということになるはずだ。それが、「現世を過ぐべき様は、念仏の申されん様に過ぐべし」という意味ではないか。

そしてこのような生き方を選ぶと、おのずと権力的世界に違和感を覚えることになり、さらにすすめば、権力そのものに正面から対峙する結果をもたらす。いうまでもなく、権力は、人を人として遇するのではなく、人々を手段視する。権力は、特定の人びとが自分たちの利害に人々を従属させるために、最終的には法律をふくむ、強圧的な力行使することだ。それが慈悲の精神と真反対にあることはいうまでもない。つまり、「念仏為先」を貫く生き方は、必然的に権力的志向とぶつかることになる。

もとより、法然上人は、政治権力との衝突をはじめから意図されたのではない。たまたま、阿弥陀仏の慈悲に忠実であろうとされたがゆえに政治権力とぶつかられたにすぎない。だが、その後の念仏者には、それが、たまたま生じた偶然的なできごとであって、「念仏

為先」が必然的に招来する出来事だとは認識できていないように思われる。

だからこそ、その後の教団再興は、時の権力者の力を平気で借りて、あるいは自ら権力者にすり寄って、つまりは、「念仏為先」を棚上げにしておいてきたのであろう。その結果、念仏者はこの世の秩序のはらむ非道や不条理に無抵抗・無関心となり、現世のいかなる現実をもまるごと容認するということになりがちとなり、その傾向は現在も変わらな

い。
だが、法然上人の念仏は、現世のありようにまったく無関心・無抵抗であることを教えているのではない。後にのべるが、念仏は阿弥陀仏の本願の裏付けをもつが故に、現世のあり方に深い関心をもつことになるはずなのである。しかし、再興された教団のその後の歴史では、現実社会の矛盾に積極的にかわろうとする念仏者の姿を見出すことはむづかしい。それはひとえに、「念仏為先」の教えが消滅していたからだといわねばなるまい。

極論をいえば、現代の既成教団において、「念仏為先」は、言葉としてはよく知られていても、またなにごとにつけて称名が尊重されはしても、その内実は、個人のたんなる心のなかの私的な営みに矮小化されているように思われる。

つまり、「念仏為先」のもっていた、阿弥陀仏の慈悲を暮らしの中心に据えるという「激烈さ」を今一度思い起こして、念仏の豊饒なはたらきを回復する必要があるのではないだろうか。

*

二つ目の問題。つまり、法然上人の教えは、「法難」後に再興されてくる教団のなかでは、それぞれの教団の利害に左右された理解や解釈がすすんで、全体として当初の「念仏

為先」が正しく継承されてきたとはいえないように思われる。

その典型的な例が、いわゆる浄土宗の「念仏為本」と浄土真宗の「信心為本」の違いの強調であろう。私の目から見れば、とくに浄土真宗が「信心為本」を強調するのは、先行する浄土宗教団との違いを明らかにするために生まれた旗印であり、親鸞が法然上人から学んだ本願念仏を正しく継承しているとはとてもいえない。

とりわけ、本願寺教団の教学が本願のいわれを聞いて「信心」を得た瞬間に「往生」が定まると強調するなかで、念仏を軽視し、その役割を「報恩」に限定したことは、本願念仏の可能性を考える上で致命的な過ちを犯したことになるのではないか。

もとより、私は、本願寺教団の長きにわたる教学論争にはくらい。まして、浄土宗教団の「念仏為先」をめぐる教学にも。ただ、法然上人の遺著や法語、消息の類、また親鸞の著作をくり返し読む中で、本願念仏が「報恩」に限定されるような、弱々しい内容に終始するものではないと確信するにいたった。

たとえば、『選択本願念仏集』の「本願章」には、「名号はこれ万徳の帰するところなり」として、阿弥陀仏の一切の内証、一切の外用がこめられたのが阿弥陀仏の名号だとのべられている。親鸞もまた『教行信証』の「行巻」の冒頭に、称名という行には、「もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり」とし、その徳は称名するものの心中に速やかに満ちる、とのべている。

もとより、称名がこのような力を發揮するためには、阿弥陀仏の誓願に対する深い信心が必要である。その「信心」のあり方について洞察を加えたのが親鸞だが、彼のいう「信心」には二重の意味がある。

一つは、誓願に納得して念仏することを決断すること。二つは、念仏によって私たちの心に生まれる「仏心」である。親鸞は、それを「(大)信心」とか「まことの心」という。つまり、念仏は阿弥陀仏が私のなかではたらくすがたなのであり、そのはたらきは凡夫の私の深層意識に阿弥陀仏の心を植えつける。それが凡夫の心に生じる仏性なのである。この仏性を「信心」と称するから混乱が生まれるのであろう。

いわば、念仏という行為によって私たちの心にも仏性が生まれるのであり、その仏性にながされて私たちは仏道を歩むのである。念仏は決して、なにかの手段ではなく、目的そのものである。念仏が仏道なのである。

要するに、親鸞は法然上人の「念仏為先」の意味を明らかにしようとしただけのことなのである。

*

念仏がわたしのなかで阿弥陀仏のはたらく姿であることに思っていると、念仏しながら人々を、差別したり、抑圧したり、排除することが、果たして認められるであろうか。

現代社会の状況に照らしていえば、人々を恐怖と不安に陥れている原子力発電所を新たに稼働しようとする目論見に、念仏をしながら賛成できるであろうか。あるいは、働く人々を正規と非正規に分断して怪しまない今日の労働環境を、念仏をしながら積極的に肯定できるのであろうか。あるいは、拡大する一方の所得格差を容認できるのであろうか。

このように、念仏を口にすることが阿弥陀仏のはたらいっている姿だとうけとめるならば、私たちには、さまざまな不条理、矛盾、問題が見えてくるようになるし、さらにその不条理や矛盾を是正してゆきたい、という気持ちにもなる。それこそが仏道の歩みにほかなら

ない。

もとより、だからといって、現実の変革が容易なわけではない。念仏者だからといってスーパーマンのような活動ができるわけではない。そもそも、念仏が私のなかではたらく阿弥陀仏の姿だと認めても、私には特別の力が湧きあがってくるという実感を得ることはむづかしい。いな、念仏をしても、今までとは一向に変わらない自分があるだけではないか、とゆらぎもする。

しかし、それは本願念仏が無力だからではない。私たちの業が深いだけのこと。そのことを自覚すれば、ますます、阿弥陀仏の誓願を頼むしかない。そうすると、一層念仏を頼む心が深くなる。そして深くなれば、いつしか、阿弥陀仏の心が、かすかではあっても匂ってくる。その匂いが私たちを励まして、この濁世を乗り切ってゆく希望と力を与えてくれる。

法然上人は、念仏には阿弥陀仏の香りがうつっていて、念仏するとその香りが身に煙ずる、と教えてくださっている。念仏はまさしく阿弥陀仏のはたらくすがたにほかならないのであり、だからこそ、念仏が現実の暮らしの基準となるのである。これこそが、現代に生きる「念仏為先」の意味ではなからうか。

(丁)

○阿満利磨先生プロフィール

1939年京都市生まれ。京都大学教育学部卒業後NHKに入局。教養番組のディレクターを経て1987年から明治学院大学国際学部教授。現在は同大名誉教授。著書に『法然の衝撃』、『法然入門』、『行動する仏教』、『宗教は国家を超えられるか』（いずれも筑摩書房）など多数。

仏像入門

石上善應 著

写真撮影

飛鳥園、杉野孝典、田枝幹宏、
永野鳴鹿荘、湯川晃敏



見方が変わる、
人生が変わる

仏像は観賞の対象ではなく、信仰の対象である。しかしその美しさゆえ、対峙するときには、信仰という最も基本的な部分が抜け落ちてしまいがちになる。それでは何度見ても仏像の真の姿を理解することはできない。

本書では如来、菩薩、天部、明王、童子、羅漢、高僧、石仏それぞれの仏像の持つ意味をよく伝える写真を収録し、その背後にある仏教思想を平易な言葉で解説する。法隆寺・百済観音像や広隆寺・弥勒菩薩像といったよく知られる仏像の他、今はなき地蔵院・阿闍如来像や法然の一周忌に弟子・源智が造立したことが近年判明した阿弥陀如来像等、東西四十四体の仏像を紹介。巻末には交通案内を収録。2013年12月10日発売。

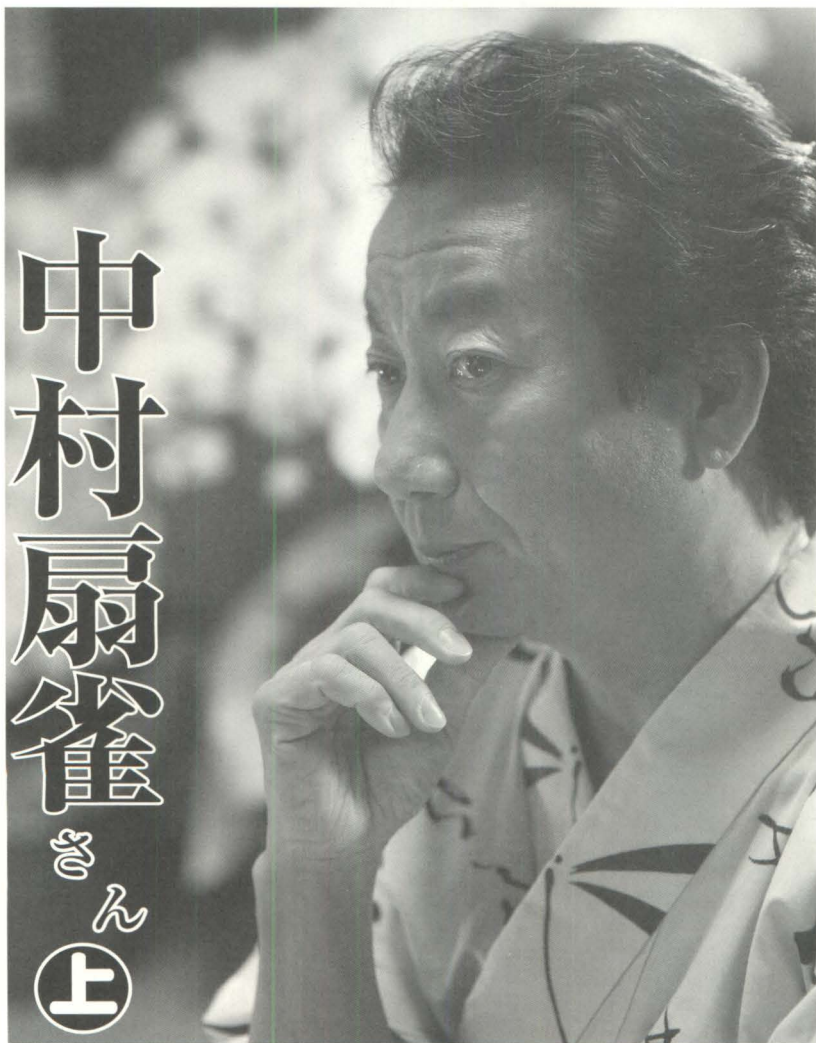
連載

会いたい人 関 容子

中村扇雀

さん

上



撮影／タカオカ邦彦

十八代目勘三郎が平成二十四年十二月に急逝し、翌年四月に新開場した歌舞伎座で、中村屋が健在ならば当然つとめるはずだった持ち役を、いろんな人が演じるのを観た。

中で最も意外だった配役は八月の第三部『江戸みやげ 狐狸^{こりこり}狐狸^{こりこり}ばなし』の伊之助が扇雀とあつたことだった。これはどういうことか。しかし考えてみると、伊之助は上方の女方役者で、序幕では女房おきわの赤い蹴出しまで洗濯してやっている設定なのだから、これは本役なのかもしれない、と納得した。

それで出かけて観てみると、勘三郎とはまた別の味の肝の据わった伊之助になっていて、喜劇を真面目に演じているところはさすがにプロ、という気がした。中村屋はこういうもの、たとえば『法界坊』とか『らくだ』の屑屋久六を演じるとなると芯から楽しんでしまい、ときどき自分の芝居に吹いたりすることがあつて、お客はまたそれを喜んだりしていたが、喜劇は本来真顔で演じるのがプロ

というものだろう。

感心したので、さっそく私は扇雀さんにそんなふうな葉書を書いた。

この十月。国立劇場大劇場では『伊賀越道中双六』が珍しく通しで、唐木政右衛門伊賀上野の仇討までがていねいに上演されていた。

いつも単独で上演されることの多い「沼津」は成駒屋一家の出演で、白塗りの呉服屋十兵衛が八十一歳の坂田藤十郎、老雲助の平作がその長男の翫雀、平作の娘お米が次男の扇雀、という配役を知ったときもびっくりした。十兵衛は実は子供のころに平作が養子に出した息子で、つまり親子の役を逆転して親子の役者がつとめる。これは前代未聞のことだ。

扇雀さんを楽屋に訪ねる前に、まず舞台を観ることにする。振り分けの重い荷物を肩によろよろとついで歩く平作と、颯爽とした十兵衛が捨台詞（アドリブ）でやりとりしながら客席に降りてくる。まず十兵衛から。

「あんた、年はいくつになる」

平成25年8月の『狐狸狐狸ばなし』で伊之助を演じる中村扇雀さん。



「へえ、七十に手の届くところで」

「わてはもう八十過ぎてるがな」

「お若うおすな。八十過ぎたお顔が見てみたいもんやな」

「こんな顔やがな」

と十兵衛が顔を突き出し、この楽屋落ちに場内は大爆笑。

扇雀さんのお米はしっとりとした情感が漂って、とても初役とは思えない出来だった。

満足して楽屋に廻ると、扇雀さんがまず『狐狸狐狸ばなし』を私が喜んだ話から始める。

「八月の伊之助の役は、おかげさまでいろんな方から褒めていただきました。前に哲明のりあきさん（勘三郎）が大阪松竹座で伊之助をなさってたとき、僕は又市という頭の足りない男を装っている狂言作者の役だったんですけど、ある日、女房おきわ役の福助さんが急病で、開演一時間前くらいに僕に代役が廻ってきたんです（又市の役は今の又五郎さん、当時の

歌昇さんでした。でも毎日舞台に出て芝居がわかってましたから大過なくつとめられた。

そしたら哲明さんがびつくりして、よくできたね、お前いなかったらとてもできなかったね、って言うてくれたけど、だって、僕はプロなんですからね。

僕の中でも大事にしてきたのは、プロフェッショナルという言葉なんです。お金をいただいていることに対する責任というか。哲明さんはその意識がとりわけ強かったと思いますよ。お金を払って観てくれる人で劇場を満員にすること、その人たちが喜んでくれて、また次につながることを。そういう意識の強い人がそばにいたんで、僕も自然とそうになりました。

京都のあるお寺さんが、あんたにこの言葉あげるわ、と言って、『玄中玄』と書いてくださった。この言葉が一番大事やで、って。玄は玄人の玄。プロ中のプロになれ、ってこ

とでしょう。今でも好きな言葉の一つです」
扇雀さんはプロフェッショナルとして、台本をじっくり読み、自分で役を研究し工夫することをいつも心がけている。

「関西系の役者は特にそうですね。東京のお客は、お父さんによく似てきたとか、誰々の型が身についてきた、ってそのまんまを喜ぶけど、僕の祖父（二代目鴈治郎）が若いころ京極の青年歌舞伎の座頭をつとめて、曾祖父（初代鴈治郎）の当り芸をその通りにやるのを曾祖父が観に来て、自分で工夫してへんやろ、って激怒して楽屋に入ってきたそうです。

哲明さんにも関西の血が流れてるし（先代中村屋のおじさんの父親は三代目歌六で関西の役者ですからね）、人に教わって安心してしまうのは落し穴だと僕も思ってます。

今の『沼津』のお米にしても、歌舞伎の台本じゃなく文楽の床本（どきほん）をよく読むと、歌舞伎では省いている言葉が見つかったんです。これを省くとお客さんに意味がよく伝わらな

い」

その件りとは、十兵衛がお金と共に置いていった臍緒書きから実の兄とわかり、残されていた印籠が夫和田志津馬の仇敵沢井股五郎の持ち物と知れて、あとを追いかけて、仇の行方を訊き出そうとするところ。

「平作が『これお米、わりや血相してどこへ行くのじゃ』って言う。『どこへとは父さん、この印籠を持っていやしやんす兄さんは仇の手がかり、あと追っかけて、志津馬さまへ』って言うんです。でもこれだとはつきりしない。で、床本を見てみると、『あと追っかけて股五郎がありかをたずね、志津馬さまへ』と言っているんですよ。『沼津』には沢井股五郎が登場しないんで、これを言うことややしくなるというわけで、誰かがカットしてそれが例になってるんだと思いますけど、今回は特に通して上演してますし、これ言わないとお客さまによくわからない、と思うんです」

扇雀さんは六つで初舞台を踏んでいくつか

役をつとめ、その後ずっと舞台から遠ざかって大学を卒業し、二十二歳から歌舞伎に本格復帰した。

今ではその経緯が実感できないほど、本当に頼もしい役者になったものだと思う。

扇雀さんは昭和三十五年十二月、四代目坂田藤十郎の次男として東京に生まれた。

母は宝塚出身の女優で、のちに政治家となつた扇千景。

その昔、二人の婚約が報じられた当時、私の家のすぐ近くの新聞販売店のショールームに、「結ばれた二つの扇」（藤十郎はそのころ二代目扇雀）というキャプションで美男美女が「北」という文字のように足を投げ出し、楽しみに芝生で寄り添う写真が出ていて、飽かず眺めたものだった。

さて、扇雀さんの初舞台は、昭和四十二年十一月歌舞伎座。曾祖父の三十三回忌追善で、兄の智太郎（翫雀）、弟の浩太郎（扇雀）の

披露のために川口松太郎が書き下した『紅梅曾我』に出演した。

「僕の本名は浩太郎ですが、名付親は川口先生で、これは皇太子の浩宮様にあやかっただそうです。兄の智太郎は御成婚当時の美智子妃殿下から川口先生が勝手に一字頂戴しちゃったようですね。僕は次男でも浩太郎なのは、兄弟平等に御自分の松太郎から太郎をくださったんだと思います」

初舞台当時の歌舞伎座筋書に、川口松太郎氏のこんな談話が載っていた。

「兄の智太郎はおっとりして和事型、弟の浩太郎は次男坊タイプの暴れん坊で積極性を持っている。その性格そのままに、曾我兄弟の祐成、時政の幼少のころ、一萬丸と箱王丸に当てはめた」

筋書には兄弟のインタビューもあつて、六歳の浩太郎君は学校が大好きで、テストはたいてい百点、九十五点以下は取ったことがない、と言っていた。

「初舞台なのに『紅梅曾我』には台詞もかなりあつて大変でした。父が万却御前という僕たちの母親の役で、祖父は伊藤祐親という祖父の役。僕が祖父と同じ舞台を踏んだのはこのときと、翌年五月に『先代萩』の千松せんまつで祖父が八汐やしおに出たときと二回だけです。お祖父さんに本当に殺されちゃうんじゃないかと思うほど、毎日怖かったですね（笑）。政岡は歌右衛門（六代目）のおじさんでしたけど、殺されずつと舞台に倒れていても、ものすごい拍手と「成駒屋！」という掛け声が聞えるから、今何やってるのか気になって、薄目を開けて少しずつ身体ずらして見ようとしていたら、お祖母おばあさんはずっと僕を見てたらしくて『死んだ子が動きまっかいな』って、あとで叱られましたけどね」

浩太郎は初舞台から二年後、『椿説弓張月』（三島由紀夫作）の島君で国立劇場特別賞を受賞したにもかかわらず、舞台からずっと離れてしまう。



慶應義塾幼稚舎の入学式でご両親と一緒に記念写真。

「僕はいやだとはひと言も言っていないんですけど、自然とそういう流れになったみたいですね。お祖父さんが『どんどろ』（『傾城阿波の鳴門』のお弓やってて、子役の巡礼おつるが橋之助君。すると彼に向かって何度でも言うんですって。『わてほんまはあんたとやり

とうないんね、孫としたいんやけどヨメが怖
おうて出してくれへんね」って言ってたって、
いまだに言われますよ（笑）。

兄貴も僕も小学校から大学まで慶応でした
から、舞台に出るために早退けしたりすると、
ほかの生徒に示しがつかないからこれ以上休
むんだったら別の学校へ行つてほしい、と担
任の先生に言われて、とにかく義務教育のう
ちは学業に専念させよう、せっかく慶応に入
ったんだから、という気持が母親の中にあっ
たんだと思いますよ。昔の役者は中学くら
いまで、芝居のこと以外何にも知らない、い
わゆる役者バカではこれからの時代は通用し
ない、一般常識を身につけないと、と思っ
たんでしょうね」

それにしても、何度か舞台に立って拍手や
歓声を浴びた経験があつて、そう簡単に遠ざ
かれるものなのだろうか。

「まず父はうちに稽古場があつても、まっ
たうちで稽古をしないんです。どこでして

のか、あれは不思議でしたね。だから全然役
者の家の雰囲気じゃない。母は女優やつて
うちにいないし、僕が中学くらいのとき国会
議員になつちやつたし、親子の交流がほとん
どなくて、僕の成績表なんか一度も見たこと
ないと思う。

兄貴は十八くらいから舞台に出始めたんで
すが、僕はその気になれなかった。大学を出
たら役者になる、四年くらいスタートが遅れ
ても真剣に努力すればそう変らないだろうと
いう理屈で、もう四年間僕にください、つて
両親に申し出たら、四、五日待たされて、い
いよ、つて返事が来たんです。あとから聞く
と、僕は役者にならないだろうと思つたそ
うで、それなら政治家に、と考えたようです。
それに母親が見たところでは、役者の兄弟と
いうのは同じ役を取り合つたりしてどうも仲
が悪い。だから本当は避けたいと思つたそう
で、僕が大学二年のとき、ある政治家の秘書
になるルートを提案されたけど、僕はひと晩

考えて断りました。もしなつてたら、僕はそれなりの政治家になつてたような気がしますけど、あくまで『たられば』の話ですからね、これは」

扇雀さんは慶応の法学部政治学科に入学。体育会のゴルフ部に入る。

「慶応体育会というのは三百六十五日休みなしのハードな練習なんです。一日四、五百発球を打って、2ラウンド駆け足で廻るようなゴルフをするんですよ。まるで軍隊みたい。僕はやるんだつたら徹底的にやるタイプなんです、どっちつかずはいやだった。今はこれに専念して、卒業したら歌舞伎に就職する気でいました。みんな卒業後にゼロからスタートするんだから、歌舞伎だつて同じこと、くらいに思つて何の不安もなかったんですが、やはりこれはちょっと甘かったですね。もう一日が四十八時間ほしい、と思つたくらい、基礎を身につけるのは大変なことでしたから」

昭和五十八年三月、大学を卒業し、その五月にはもう京都南座の舞台に立っている。

「顔の作り方からしてわかりません。でも子供じゃないから顔突き出してやつてもらうのは恥かしいんで、父のお弟子に教えてもらつて初日には自分で化粧もやりました。父の『土屋主税』で、僕は河瀬六弥という前髪の役。『只今御門前へ……』つて赤穂義士の訪れを言いに来るだけの役なんです、終つたら父に『お前、焦点が合つてへんかったで』と言われました（笑）。まったく覚えてないですけど。」

その前月の四月十三日、祖父が亡くなるんです。三年前の南座の顔見世で祖父が倒れて、兄貴が『曾根崎心中』の徳兵衛を代役でつとめて評判になつたんですが、そのときはゴルフ部の冬合宿中でお見舞に行けないし、お祖父さん大丈夫かな、と思つたくらいでした。

僕は大人になってから祖父と一度も歌舞伎の話をしたことなかったし、一緒に舞台にも

立てなかった。もったいなかったと思いますね。それまで祖父は生きてたんだから。でも僕の中に絶対先祖の役者の血が流れてることは確信しているんです。このごろお祖父ちゃんに感じが似てきた、つてよく言われますしね」

復帰の半年後、近松座の『こぢやまは 嬬山姥』で糸萩の役がつき、初めて女方をつとめる。

「声の出し方がわからない、衣裳を着てまともに歩けない、あれもこれもできない、という状況なのに、父がお前が女方で智が立役だ、つて言うんです。このときは武智鉄二先生御夫妻に徹底的に教えていただきました。そのころお二人は鎌倉にいらつしゃつて、逗子の渚ホテルの奥の座敷で、奥様の川口秀子先生が地唄舞をひたすらお稽古してくださる。武智先生は台詞を口写して教えてくださつて、それでどうにか初めての女方の舞台に立てたんです」

それからほとんど女方の役がつくように

なり、あるとき『野崎村』のお染の役が来た。『うちには桜彩お桜という古い女方がいて、言わば中村屋の小山三さんですよ（笑）。親父が『ねえはんに聞け』つて。桜彩さんのことですよ。でもお弟子は本舞台でお染なんかやつたことないから、雛助さんを見て覚えてたのを、僕に教えるわけです。初日の前の日、父が見に来て、ダメだ、それ、ちゃうで、つて変えられた。だったら最初から教えてよ、つて思いますよね。教えた『ねえはん』も昔の人だからヘソ曲げちゃつて（笑）、あと教えてくれなくなっちゃう。どうお？ つて訊いても、それで結構、私はよう知りまへん、なんて。ねえ、でも言うなれば、どうなの？ へえ、言うなればですねえ、つて（笑）、それからやおらいろいろ言い始めてくれる。もう本当に苦労しました」（つづく）

仏は一切衆生をあわれみて、よきをも、あしきをもわたし給えども、善人を見てはよろこび、悪人を見てはかなしみ給えるなり。よき地によき種をまかんがごとし、かまえて善人にしてしかも念仏をも修すべし。これを真実に仏教にしたこう者というなり。

(法然上人『念仏往生義』)

阿弥陀さまはあらゆる人々を哀れみ、善い人も悪い人もお浄土へ導き渡して下さいますが、善人を見ては喜び、悪人を見ては悲しまれるのです。ですから、肥沃な土地に良い種を蒔けば良い作物が実るように、是非とも善人としての日暮らしを送るよう心がけ、しかもお念仏を称えなさい。こうした人を「真に仏教に従う者」というのです。

お・も・て・な・し——仏さまに喜ばれる日暮らしを——

あけましておめでとうございます。平成二十六年も「響流十方」をどうぞよろしくお願い致します。さて、昨年十二月二日、ユーキャン新語流行語大賞が発表され、昭和五十九年の創設以来、史上初、何と四語が大賞に選出されました。まずは〈今でしょ!〉〈じえじえじえ〉〈倍返し〉の三語です。なるほど、どれもこれも多くのメディアを通じて繰り返し報道され、自然と私達の口をついて出てくるようになった、まさに一年を代表するにふさわしい言葉ばかりでした。そして、もう一つの大賞は、滝川クリステルさんが、オリンピック招致活動の最終プレゼンテーションにおいて、パフォーマンスを交え、最後には合掌の姿で紹介してくれた〈お・も・て・な・し〉です。こちらは、日本社会に根付いている、お客さまを歓待する心を見事に言い表してくれました。

滝川さんは、流暢なフランス語のスピーチの中で、「オリンピックを招致している東京は、私達にしかできない独自のやり方で皆さまをお迎えします。日本語ではそれを〈おもてなし〉という一語で表現できます。それは見返りを求めないホスピタリティの精神であり、日本人が先祖代々受け継ぎながら、現代日本の最先端文化にも深く根付いている心そのものでもあり、お迎えするお客さまを心から大切にすることを示しています」と述べられました。

なるほど、さまざまな統計を見ても、わが国ほど、お客さまを丁寧に迎え入れ、微に入り細に入り歓待する国は他には見あたらないようです。もちろん、そうした「おもてなし」の心は、滝川さんがおっしゃるように、私達のご先祖さまが、その長い歴史の中でゆつくりと育み、培って来てくれた大切な遺産であります。そして、その源泉こそ、自分よりもまずは回りの人々のことを第一に考えようとする大乘仏教の精神に求められるものでしょう。

わが国において宗派を越え、僧俗を問わず、広く仏教徒に唱えられている誓い（総願）は、度（迷いの世界に生きるすべての人々を覺りの境地に渡〔度〕らせるという願）・断（迷いを生み出す数限りない煩惱をすべて断滅するという願）・知（数限りないみ仏の教えを学び知り尽くすという願）・証（この上ない覺りの境地をわが身に体得〔証得〕するという願）の四つの段階から成り立っています。このように大乘仏教の教えは、自身に利益を得ようとする願（断・知・証）の前に、あらゆる人々を必ずや覺りの境地に救い導こうとする願（度）を第一に据えているのです。

もちろん、法然上人がお示しのように、私達一人一人が成し得る仏道実践など、まことに微々たるものであって、ましてや、この世において、この身この

ままで覚りを目指すことなど、考えることさえおこがましいと言わざるを得ません。ですから、浄土宗の教えに帰依した者が唱える総願には、これら四段階の誓いの後に、「お念仏を称える功德にあずかり、皆共に浄土往生を遂げて、そこで覚りを目指します」という一節が加えられていることを忘れてはいけません。

しかし、だからといって、私達が成し得る仏道実践をおろそかにしていいはずなどありません。「この身このままで覚ることなど決してできない」という深い自省と謙虚な姿勢を保ちつつ、多くの方からこれまで与えていただいたご恩への〈倍返し〉（本来の「倍返し」の用例は「仕返し」ではなく、「ご恩返し」の意味です）の思いで、それを先延ばしせず、〈今でしょ！〉と心を決めて、周囲の人々への〈おもてなし〉を実践していくことこそ肝要なのです。そして、そうした日暮らしを送っている念仏行者の姿を、阿弥陀さまは目を細めてお喜びいただけることでしょう。冒頭の法然上人のご法語は、私達のそうしたありようを優しく論じて下さるのです。すると〈じえじえじえ〉なことに、そんな念仏行者の心の内には、知らぬまに徳が積み重ねられていくようです。

与えても 減らぬ親切 残る徳

合掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十八回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その7



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。そんななか、ヨーロッパ初の比丘が誕生したと知り強い関心を覚える。法名は三界の智者を意味するニャーナティロカ。しかし、すでに彼は、海旭と行き違いに、南伝仏教の聖地セイロン（現スリランカ）に渡って修行中。爾来十六年、碧眼比丘が来日、ついに二人に邂逅の時が訪れた。所は海旭が帰国して住職をつとめる深川は西光寺。すでに海旭は日本を代表する社会派和尚。ニャーナティロカは国際仏教界の泰斗となっていた。碧眼比丘が、作曲家志望がビルマで比丘になり毒蛇に悩まされながらどんな修行生活をおくっているかを語り終えたところで、話題はそれぞれの救貧活動に転じた。

身内からの 抵抗を乗り越え

話しぶりでは碧眼比丘の救貧事業は順調に聞こえたが、始めるにあたって周囲から激しい抵抗をうけたのではないかと海旭は訝った。自身も労働共済会を立ち上げるときに周囲から猛反対をうけたからだ。最初の抵抗は身内からだ。底辺の人々の救済に地元の寺として手を差し伸べるべきだと賛意を求めると、海旭をしたって西光寺に寄宿している愛弟子たちの間からも、「海旭先生、そんなことは耶穌の専売ですから、耶穌にまかせておけばいいではありませんか」と異論が出て、海旭は思わず言葉を荒らげて「こ、これこそ仏教の仕事だ、な、なんとしてもやらねばならない」と激論になった。

海旭はそんな自身の体験をふまえて碧眼比丘に訊ねた。「すんなりといきましたか。周囲から抵抗はありませんでしたか？」

碧眼比丘は苦笑を浮かべた。「ありました

とも。それはそれは激しいものでした。抵抗の根柢は、間違つた因果応報論、輪廻転生論の俗流解釈によるものですが、前世の行ないが悪かつたのだからアウトカーストに生まれただ、そんな連中に手を差し伸べる必要はないと。特にカーストの最上位の有力支援者にはそういう考えの方もいて、説得に苦労しましたが、最後は納得してくれました」

「当のアウトカーストの人々はどうですか」と海旭は質問を重ねた。「彼らを仏教に帰依させるのは、生活にかかわることもあつて大変だつたのではないですか」

「おっしゃるとおりです」と碧眼比丘は頷いた。「アウトカーストの人だけに許されている『生業』があります。援助を受けるのはいいが、場合によつてはそれを捨てなければならぬことになる。そうそう、こんなことがあつて最初は驚かされました。ある街なかで魚をさばいている人がいる。セイロンやビルマはいわばほぼ国民皆仏教徒ですから、彼も仏教徒だと思つて、殺生をしていいのかと

尋ねたところ、私はキリスト教徒だと。後でわかりましたが、それは信仰上の選択ではなく生活のための便法なのです。というわけで当初はアウトカーストからも抵抗がありました。しかし——」といつて碧眼比丘は一息入れた。「それでもロディヤーの中から私を慕つて仏門に入り、島の隠遁所で修行するものも出てきました。そうした見習い僧の中には、ロディヤーの頭領の息子がおりまして、私のもとで比丘となり、いま私の代理をつとめ周囲の誰からも敬愛されています。おかげで内と外の両方からの抵抗はなくなりました」

慈善は人の 財を奪う「弱盗」か

海旭は、もうひとつ労働共済会を立ち上げ運営するにあつての「閥門」を思い出した。それは、畏友で東京帝大の宗教学の教授、姉崎正治からの「異議」だった。姉崎はわざわざ西光寺を訪れて海旭にこう問い質した。

「なぜ政府の替わりを仏教がしなければなら

ないのか。これについては、すでに仏教界にも批判があることは知っているだろう。きみと同じ新仏教の同人の杉村楚人冠は、慈善は人の財を奪う「弱盗」だと言っている、すなわち楚人冠のいう慈善とはきみの社会事業、労働共済会ではないか。また、私と同じ東京帝大の宗教学の高楠順次郎くんは、仏教の慈善はキリスト教の模倣で仏教の真理から出ていないと断じている」

海旭は姉崎とのやりとりを想起して碧眼比丘に質した「救貧は政府の仕事である、あるいは仏教がやることではないとは思いませんか」

碧眼比丘は大きくかぶりをふった。「先ほどお話したようにセイロン当局の救貧政策は形だけのことで、まったく効果をあげていません。政府がやらなければわれわれがやるしかない。それは当然のことだと。また、慈善は人の財を奪う「弱盗」だなどというのは、ためにする極論で私は採りません。さらに、キリスト教の模倣だという批判ですが、真似

だろうと、良いことをなすのは良いことではないですか。そもそも私は幼少時には敬虔なカトリックで、貧しい人に施しをするのは当然というところで育ってきたこともあるので、抵抗がないのかもしれませんが。キリスト教のよいところは太に学べばいいのではないですか」そこで碧眼比丘は逆に海旭に質問を投げ返した。「では、貴僧はそうした周囲の反論、異議にどう答えられたのか」

海旭は背筋を伸ばすと碧眼比丘の目を見据えた。「こう反論しました。要は現代社会に求められる宗教とはなにかだと」海旭の口調の熱のこもった変わり様に、今度は碧眼比丘が気圧される番だった。「神学的宗教、教会的宗教は無用。牧師や僧侶を育てるだけの宗教も無用。社会生活に即した宗教こそが実に時代の要求する宗教というべきです。その点、拙僧は、ヨーロッパの宗教、つまりはキリスト教は貧富のすぐれた調整者であることを目の当たりにして、日本では仏教徒こそこれを担うべきだと」海旭はそこで一息入れると語

氣をいっそう強めた。「仏教は本来生活即宗教であって、利楽有情だの衆生恩だのという他教には類のない飛び切りの社会道德、公共道德の根基を有しているではないか。その立教の根底において現代社会の規範となり、社会問題を解決するための思想上・実行上の基準を示すものということができる。これぞ仏教の精神だと思うが如何、と」

碧眼比丘は何度も深く頷いた。「生活即宗教であれ、という考えには私も大いに同感です。そもそもわがセイロンでは、そして隣国のタイでもビルマでも、仏教がいわば国民の八割九割が仏教に帰依しており、いやがうえでも生活即宗教ですから、疑念の余地はありません」碧眼比丘は口調を厳しくしてつづけた。「実は日本もセイロンほどではないにしても国民皆仏教徒だと思っていました。しかし残念ながら正直いってがっかりさせられました。在家の手本となるべき比丘たるものが妻帯するは酒は飲むは。これでは仏教の生活化であって、貴僧のいわれる生活即仏

教とは似て非なるものではないですか」

「ご指摘のとおりで頭がいたい」心なしか海旭の語氣がいささか弱くなった。「それはわが導師、福田行誠師がかねてから嘆いておったことです。私も帰国してますますそれが強まっていることに危機感を抱いて、新戒律主義をとなえて、なんとか生活即仏教をめざそうとしているところですよ」

半島からの困窮者に 救済の手を

碧眼比丘は手をふった。「いやいや貴僧を責めているわけではありません。貴僧の生涯不犯、禁酒禁煙主義には大いに敬意を表したい。そしてそれが日本の仏教を再生させる弾みとなることを願っております。そのためにも、これから先、貴僧は社会事業をどうされるおつもりか」

「実は、来年からやろうと準備をすすめていることがあります」海旭は目を輝かせて身を乗り出した。「それは、このところ急増して

いる半島の人々への救貧と教育感化事業です。そのための学校をつくるべく建物、職員は確保しました。彼らはアウトカーストではありませんが、ひどいことに日本ではそれに近い扱いをうけています」

すでにその下地準備はなされていた。海旭の浄土宗労働共済会では、設立以来、正月の元日二日に千食の雑煮の炊き出しを行なっていたが、日本人も朝鮮人も区別なく接待され、当時深川枝川町にあった朝鮮人居住地からも大勢がやって来ていた。朝鮮半島からの困窮者に対する本格的救済事業は、仏教によるものとしては本邦初とといったいい先駆的試みであった。

「それは素晴らしいことです。ぜひとも成功することを祈っています」碧眼比丘はそう言うとき、手を差し伸べて海旭の手をしっかりと握った。

社会事業と仏教、宗教をめぐる議論をさらに深めていったが、時計をみると針はさらに一時間すすんで三時になろうとしている。海

旭には、どうしても訊いておかなければならないことがあった。政治、それも国際問題と宗教とのかかわりである。実はこのとき海旭はインド独立運動の闘士で宗主国の英国人総督を襲撃して日本に亡命していたラス・ビハリ・ボースとその一党を支援していた。いま目の前にいるニャーナティロカは、第一次世界大戦勃発と同時に、仏教高僧でありながらドイツ人であるために、スパイの容疑をかけられて収容所に抑留された。いや、今もなお某国からその疑いを抱かれている節があった。そんな人物だからこそ、海旭が抱えている「国際問題」にも貴重なアドバイスをもらえるかもしれない。そう思っ、今度は海旭のほうから会話に転轍機のスイッチを入れた。「そろそろ夜が аж けます。話はつきないのですが、ここで話題をかえて、貴台の抑留生活についてうかがいたい」

(この項つづく)

第五十八回

江戸を歩く



柴又

森清鑑

大江戸ウォーカー

新宿（にいじゅく）

葛飾柴又は江戸から二里半、江戸郊外にある。通常、江戸っ子は水戸街道を行く。まず千住大橋を渡り、千住の宿場町（北千住）が終わる処で、奥州街道と別れて右に曲がり、そのまま水戸街道を東に歩く。小菅村、砂原村を抜け、亀有村に着くと、南北に中川が流れており、ここで渡し船に乗り、対岸の宿場町に着く。この宿場を江戸っ子は、新しくできた宿と言う意味で、新宿と呼んだ。そのため、この中川の渡しを「にいじゅくの渡し」という。広重はこの光景を絵にしている。中川はゆるやかに流れ、土手松林の側に渡り客の待機所というべき宿が描かれている。宿の右手に渡し場。段々を川縁に降りる。渡し場の処で小舟に乗って釣りを楽しむ二人。鯉、スズキ、せいご、なまず、鮎などが釣れる。江戸に向かって荷物を運ぶ、帆掛け船が川の中央を走る。この絵は、亀有側から新宿方向

を描いている。このあたり、中川の流れは緩やかで、周囲は、のどかな光景を醸している。

新宿は、千住から最初の宿場で、上宿、中宿、下宿と並び、宿場町の体裁を整えている。新宿でくつろいだ後、さらに東に歩くと、金町村。すると大きな流れに出る。これが利根川（古利根川、江戸川）である。その昔、利根川はここを下って江戸湾に注いでいた。しかし、度重なる大洪水に見舞われ、これに対処するため、江戸初期から上流の関宿で二つに分流する大工事が連綿と行われ、本流は、銚子へ、そして分流は江戸湾に注ぐことになった。このような経緯のため、今の江戸川は、江戸時代には、そのまま利根川とか古利根川と、呼ばれている。この分流の放水路としての拡大工事はその後も続く。水戸街道は古利根川にそってちよつと北上し、それから川を渡ってさらに東進する。そして利根川を渡って下総の国に入る。渡る前に、金町関所（松戸関所）があり、ここで旅人は調べを受けて、

それから渡しに乗るのである。なにしろ江戸への入り口、出口であるから、箱根の関所に次ぐ重関所。「入り鉄砲に出女」が厳しく詮議された。

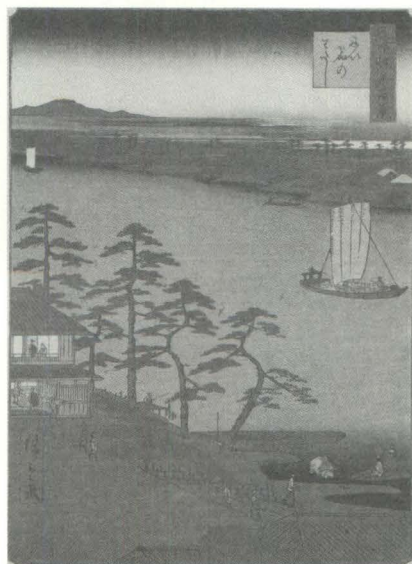
この関所の手前に、南に下る道がある。水戸街道を右に曲がって、しばらく歩くと、柴又村に出る。この分かれ道から北に上る水戸街道沿いに、鎮座しているのが香取宮である。この辺り、旅人の通行量も多い。

香取宮（葛西神社）

江戸期には香取宮と呼ばれていた、この神社も明治以降、葛西神社（東金町六丁目十番五号）となる。創建は平安末期（一一八四）。葛西三郎清重が香取神宮の分霊を祀ったのが始まりで、広い葛西地区一帯の総鎮守府として崇められていた。徳川家康も立ち寄っている。そして当社で行われていた、人形芝居の神事を見て大感激する。その結果、御朱印を送ることになる。家康は江戸東の鬼門封じを当社に託したのではなからうか。なにしろ利

根川から東は下総の国なのだから。この時以来、当宮でも家康を奉ることになる。

香取宮は「葛西ばやし」発祥の地として名高い。葛西囃子というが、単なる地方の存在ではなく、後年、神田の天下祭り、赤坂の山王祭、深川の八幡祭、浅草の三社祭といった江戸を代表する祭りのお囃子の大半をこの葛西囃子が占めることになる。別名「五人ばやし」。我々が今日、祭りで普通に目にする、



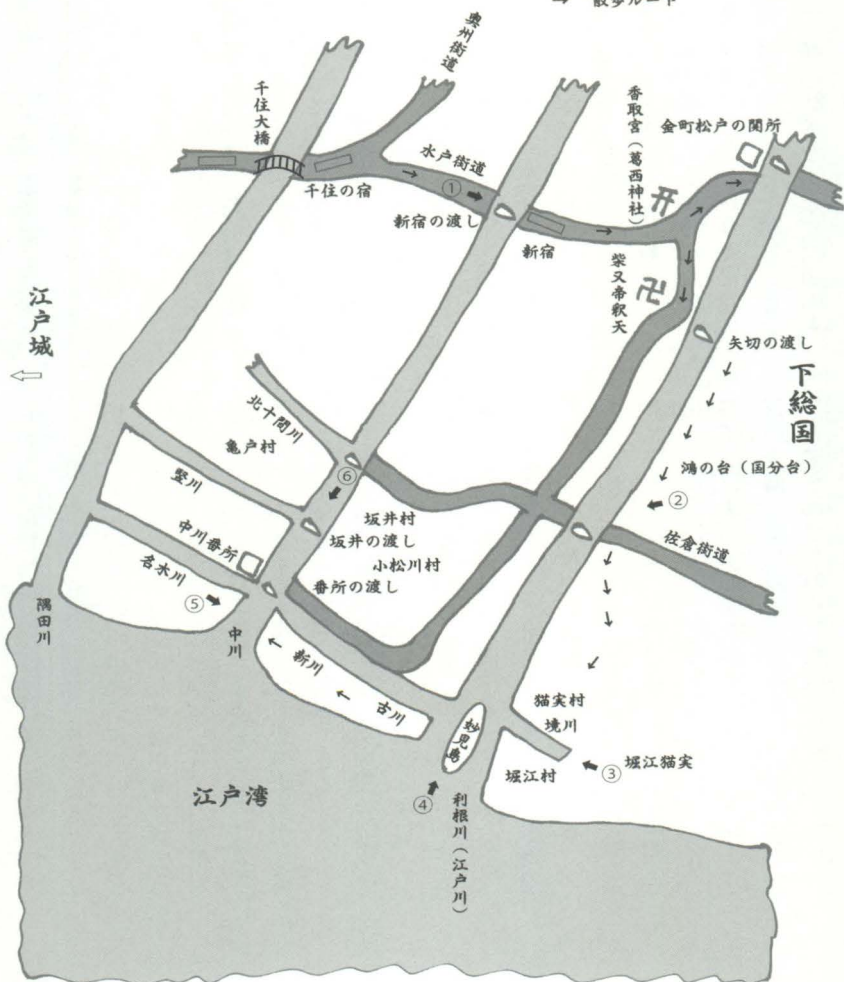
◆広重「にいじゅくの渡し」手前は亀有、対岸が新宿

柴又散步

渡し

広重絵方向○内は絵番

→ 散歩ルート



◆散步図

お囃子の源流ともいえよう。葛西囃子は、家康も見た、かの名高い人形芝居操り狂言（三番叟）のバックミュージックとして発展してきたようである。

柴又帝釈天

香取宮の祭りを楽しんだ後、利根川（江戸川）を渡らずに、川に沿って、南に下る。左を見ると、滔々^{とうとう}と流れる利根川の光景。辺りは柴又村の田畑。まもなく帝釈天に着く。柴又の帝釈天は、今また、映画「寅さんシリーズ」で脚光を浴び、訪れる人が増えているが、江戸時代にも、大勢の参拝客で賑わった処である。当寺は、江戸に流行った、庚申信仰のメッカでもあった。柴又の帝釈様。正式には経栄山題経寺（日蓮宗）。寛永の一六二九年に開山。日蓮聖人が自ら刻んだ「帝釈天の板本尊」を有する。板本尊が再発見されたのが一七七九年の春。まさに、その日は庚申の日であった。以来、当寺はこの日を縁日と定める。時あたかも大勢の死者を出した天明の大

飢饉。日敬上人は、この板本尊を背負って江戸の町を歩き、病氣、災害で苦しむ人々を救済した。この頃、江戸中に庚申信仰が大流行し、いたるところに庚申様や庚申塚が建てられていた。こうしたことから、柴又の帝釈天は、庶民の寺として親しまれることになる。次第に、門前町が形成され、そのよすがは寅さんが活躍する舞台で、想像できる。

この寺は幸いにして、第二次大戦の戦禍を免れたために、今日でも江戸情緒を残し、それが人々を惹きつけるものになっている。ともあれ建造物は幾度も建て替えられている。商店街が終わると、独特な、跳ね上げ屋根の優美な張りを持つ二天門が眼前に現れる。二天門は明治二十九年、名工坂田留吉^{りゅうきち}の拵え。納められている二天像は平安の作。江戸期には小さな山門で、入ると正面に帝釈堂があり、右に祖師堂、左に庫裡が配置されている。二天門を潜って左側の大鐘楼堂は、昭和三十年に完成されたもので、昭和の名鐘とされている。

る。総ケヤキ造りの本堂（帝釈堂）も坂田留吉の作。そして帝釈堂の内殿に帝釈天板本尊が奉られている。内殿の外部は全面装飾彫刻で覆われている。帝釈堂の右側に建つ祖師堂が、題経寺の本来の本堂である。そして釈迦堂は江戸末期に建立された当寺最古の建築。釈迦堂には奈良時代作の釈迦如来立像がある。

また、題経寺の墓地には、天明の大飢饉を呼び起こした浅間山噴火溺死者の供養塔が立っている。これは利根川に流れ着いた溺死者を柴又村の人達が引き上げ、供養し、当寺に建てられたものである（区指定文化財）。

利根川

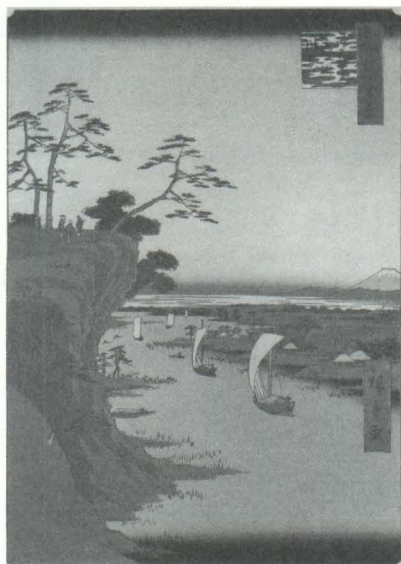
矢切の渡し

帝釈天から利根川（江戸川）に向かうと川沿いに今日も有名な川魚料理の店がある。川千家は、安永年間（一七七二〜八二）、川甚は寛政年間の創業。帝釈天をお参りした後に酒を呑みながら旨い料理を味わう。ほんのち

よつと川沿いを下ると歌で有名な矢切の渡し。利根川の向こうは下総国である。渡ると矢切村（松戸）。戦国時代、ここで国府台合戦が行われ、里見八犬伝で有名な里見方は、矢が切れて敗北。地名として残った。今日も民営の渡し船が通っている。矢切れへの渡しである。

鴻の台

さらに南に下ると、国府台。江戸以前、下

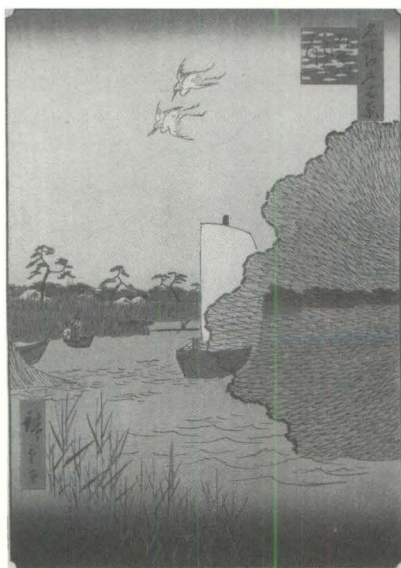


◆広重「鴻の台、とね川風景」

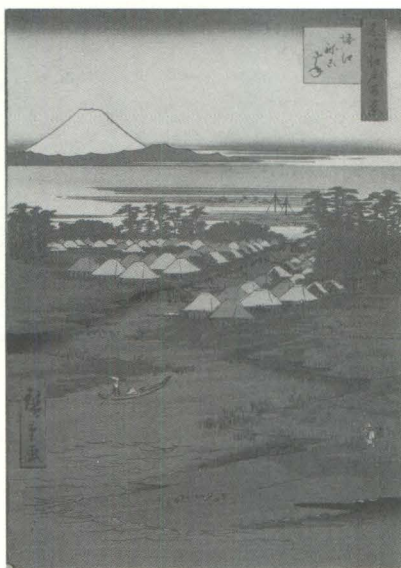
総国の国府が置かれ、国分寺が建てられる。江戸期にはコウノトリが棲み着いたため鴻の台。ここで下総国から江戸に向かって、広重は「鴻の台、とね川風景」を描く。鴻の台は展望が良く、川を挟んでどこまでも広がる平地。その果てに江戸城、浅草寺、東本願寺、上野の山が見えた。絵の右端中央には富士が描かれている。左側は鴻の台の高い崖。その上で町民が江戸の方向を眺望している。荷物を積んだ帆掛け船が数珠つなぎに走り、真に絶景である。利根川の本流は関宿から銚子に下っているが、江戸と下総を分ける、この分流も荷物の運搬ルートとして大活用された。利根川の内側に流れる、中川に入り込む小名木川、豎川を通じて江戸に物資が運ばれたのである。

堀江村、猫実村

利根川が江戸湾に注ぐ、下総側にあった村が堀江村、猫実村である。双方ともに漁村で、ここで捕れた魚介類を江戸に行商に行く人も



◆広重「利根川ばらばらまつ」



◆広重「堀江ねござね」

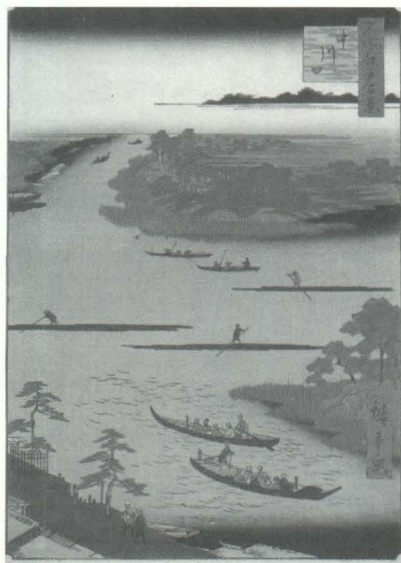
多かった。両村の家並みを分けて中央に走る境川、その先は利根川。そして古川、新川（新たに掘削された運河）を通して中川へ。さらに小名木川を通り、大川（隅田川）に出る。絵の左上には富士と丹沢の峰が描かれている。

利根川が江戸湾に流れ込む広瀬、つまり堀江、猫実村の前に中州の妙見島があり、渡ると古川。これを西に遡上すると中川に出る。広重がこの利根川河口域辺りの様子を描いたと思われるのが、「利根川ばらばらまつ」である。江戸湾に接しているため、川幅は広い。絵の中央正面が妙見島。そこに確かに松の木がばらばらと立っている。帆掛け船が漁をしている。中央右に投網が投げられ、白魚を獲っている。上空には白鷺が二羽飛んでいる自然そのものの優雅な光景。今日では想像すらできかねる世界がそこにはある。

中川

さて、古川、新川を西に江戸に向かおう。

中川付近になると里の人は、船堀川とか行徳川と呼んでいる。中川を渡り小名木川に出る。この渡しは番所渡しともいわれている。小名木川に入る右手に中川御関所があり、なにしろ塩などが運ばれるため、船役人が厳重に見張っている。処の人は中川番所と略して言っていたが、有名な番所で中川の渡しを番所渡しともいう。小名木川は、隅田川に直結し、物資運搬と隅田川、中川の氾濫を防ぐ目的で



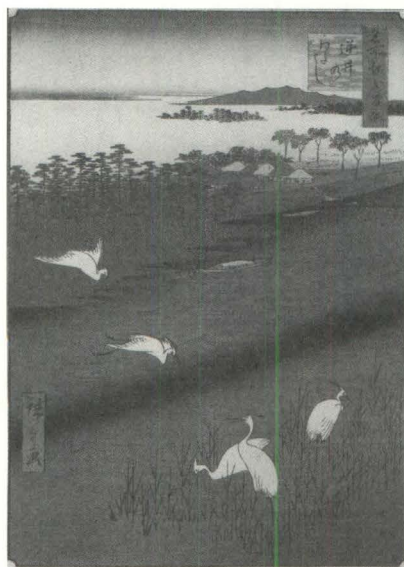
◆広重「中川口」

掘削された運河で、普通はおだやかな流れである。この辺りを描いたのが広重の「中川口」である。絵の中央を横断するのが中川で、船人を乗せた船が行き交う、下の川が小名木川。下左が「入り鉄砲に出女」を厳しく取り締まった水上関所「御番所」である。絵の上部左、流れる運河は新川。この絵は縦横無尽に張り巡らされた江戸の川風景を見事に表現している。

中川を渡らず、船舵を右にとつて、北に行くともうひとつ、小名木川と並行して隅田川につながる人口運河、堅川たてかわに出る。逆井村、小松川村と堅川側の亀戸村を結ぶ中川の渡しわたりが「逆井の渡し」。この辺りを広重は江戸湾に向かつて描いている。江戸初期、下総国佐倉に行く人々は隅田川を渡って、堅川沿いに中川に出て、逆井の渡しで小松川村へ（この小松川村の特産が「小松菜」である）そして佐倉へと向かった。これを佐倉街道という。元禄の頃からは、水戸街道を歩き、新宿を下し、もとの佐倉街道に出るコースが一般的

となる。逆井の渡しや逆井村の語源は、江戸湾の満潮時に海水がこの辺りまで逆流してきたことによる。絵の上部は下総側で、渡しの側に家々が集まっている。多数の白鷺が舞う、のどかな風景。ここも現代人には信じがたい美景である。

【参考文献】
「広重の大江戸名所百景散歩」人文社



◆広重「逆井の渡し」

謹 賀 新 年

平成二十六年

浄土門主
總本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606 825
京都市左京区田中門前町二〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (111) 〇六〇三

浄土宗宗務総長

豊岡獠尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作
誕生寺

〒709 302 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL (七二八) 二一〇二
FAX 〇八六 (七二八) 二一六二

謹 賀 新 年

平成二十六年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

大鹿山弘経寺前住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二・九・二八

定義如来

極楽山
西方寺

〒989 3213 仙台市青葉台大倉字上下
電話〇一一(三九)二一〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: sahouji@johg.or.jp

本應寺 隠老

熊谷靖彦

〒849 1411 嬉野市塩田町馬場下甲六六一・一

大吉寺住職

成田昌憲

〒154 0017 世田谷区世田谷四・七・九

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

東日本大震災の早期復興を念じます。

川越七福神
吞龍上人祈願所 毎月八日縁日

蓮馨寺

住職 糸原恒久

〒350 0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

九品阿弥陀如来

淨真寺

〒158 0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 **飯島英徳**

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22 - 4677・44 - 2695

謹 賀 新 年

平成二十六年

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

お骨仏の寺

一
心
寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七一)〇四四四

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

学校法人 淑徳学園
淑徳SC中等部高等部

理事長
校長

麻生諦善

鶏頭山安楽寺

飯田 實雄

〒399-4115 胸ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)一三二六〇

岩淵

天王山
正光寺

東京都北区岩淵町三十一・十一

(学)大乘淑徳学園
理事長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・一二

勝 願 寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇三二七

赤坂六地藏尊

浄 土 寺

住職 阿川正貫

〒107-0062 東京都港区赤坂四・三・五

謹賀新年

平成二十六年

鎌倉大仏殿

高德院

〒248
0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七 (一一) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (一一) 五〇五一

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

森巖寺

加藤昌康

〒155
0032 世田谷区代沢三・二七・一

清水湊

忠高山
實相寺

願行寺

佐藤成順

〒140
0004 品川区南品川二・一・一二

光円寺住職

佐藤良純

〒112
0002 文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141
0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三 (三四四) 八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

●相

〈特選〉

秋灯や手相見の掌のやわらかし

小林 苑を

道路のひと隅に小さい灯をともしていたのを、今はあまり見かけないだろうから、屋内と見てよからう。手を開いて差し出すと片手で受け止める。その掌をやわらかいととらえた。緊張感はふつとやわらぐ。

〈佳作〉

相輪に粉雪舞うや古都の街

佐藤 雅子

獵期来る父子相伝の革帽子

斉藤 功

村人の人相よろしき秋の暮れ

増田 信子

●湖

〈特選〉

ふる里に小さき湖あり鴨帰る

井村 善也

人家から離れたところに、小さいとはいえ湖があつて、季節が来れば鳥が渡つて来、何か月か過ぎると帰つて行く。寒い間暮らして

いた鴨がいま帰って行くところだ。しばらく
すると夏を過ぐす鳥がやってくる。

〈佳作〉

山肌の色変わり来ぬ秋の湖

當間あき子

冬紅葉湖のほとりの殉難碑

斉田 仁

人造湖落ち葉うち寄るひとところ

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

浮かびくる鯉に日当たる小春かな

吉崎美和子

寒くなってきた。鯉も底に沈んでいることが
多くなつた。時々暖かい日がやってくると、
静かに浮かんでくる。いまその鯉に日が当た
っている。鯉の日向ぼつこと言ってもよい姿
である。波も起きない。

〈佳作〉

履かぬままの下駄の埃や歳の暮

遠井美智雄

一つずつ点る島の灯冬めきぬ

池田 伊吹

玉葱を植えて雨待つ屋敷畑

黄瀬 鴻



誌上句会〈編集部選〉

■相

冬の海入り日飲み込む相克図
耳うれし川音の時雨相模川
秋霖や相合傘の落書見る
冬の日の金運薄き手相待つ
寒灯のチラシや育児相談所
繋留舟相互に曳いて暮の秋
蛇穴に入る相の手はどっこいしょ

早乙女喜栄子
當間あさ子
森 懷人
斉田 仁
横田美奈子
水島はるか
工藤 掉

■湖

秋深く湖面に群れる秋茜
遙かなる西湖にたゆたう冬霞
北風俄となるや淡水湖

森 懷人
早乙女喜栄子
佐藤雅子

浄土誌上句会の
お知らせ

締切・二〇一四年一月二十日
発表・『浄土』二〇一四年四月号
選者・増田河郎子(「南風」主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

円光
自由題

どこまでも地味な湖紅葉す
照柿や湖畔に集う漕艇部
船影ひとつ湖面を滑るように冬
冬の蝶冬の湖面でこきれる
笹鳴けばダム湖湖底の村のこと
湖の见えて霜夜のロビーかな
青濁るダム湖を今朝の冬とする

鳥羽 梓
内藤隼人
秋山秀雄
柳田義孝
神崎由利重
町田惣太郎
柴田幸生

■自由題

樹木なぎ競いすぎゆく野分かな
傘寿に元祖涅槃の命観る
浮雲や馬駆る野辺の秋深し
柿のれん吊るして湯の街客を呼ぶ
天高しひとり舞台の鳶かな
秋蝶のほつぽつと湧く花野かな
流木の紆余曲折のまま乾く
吊り橋は手を振るところ薄紅葉
近道は団栗道となつており
新蕎麦の一本残る秋思かな

森 懷人
飯島英徳
早乙女喜栄子
佐藤雅子
當間あさ子
長谷川裕
斉田 仁
村田 篠
工藤 掉
村松芳郎

新年の東雲空に杯をあぐ

岱潤

成道会の講演会で養老孟司先生のお話を聞いた。演壇の前を歩きながら話される、力の人らしい自然な話し方はさすがというほかない。しかし内容は大変深く、人間の生き方に対する問いかけだった。戦前は自分の命を、国家や社会や人のためという考え方があまりに強く、その反動か、戦後は自分とは何か、自己中心のともいえる方向へ偏りすぎていないかという問いかけだ。

自分の人生自分のものという考え方は、明らかな間違えと指摘し、その考え方が自殺を誘引しているとする。

『夜と霧』の作者ヴィクトール・フランクルは、ナチスのユダヤ人強制収容所という過酷な場面を描きながら、そこを生き抜く力として、「人生の意味は自分の中にはない」という言葉を語っている。人間が生きる意味は、人のためという考え方を、価値観の半分には置くべきであると何度も強調された。

以前がんの告知を巡ってアンケートを採ったとき、本人に直接してほしいという人と、家族にはほしくないでほしいという人が、七割でほぼ同数であったそうだ。どんな状況下でも、否過酷な状況下など、人は人への思いやりや気遣いによって生きることができるのかもしれない。

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 舩博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山光明寺)
 (敬称略・五十音順)

仏教で説く幸福観も、自分の欲望の達成ではなく、人の幸せを願ったときにあると、様々な経典で説き続けている。一年の門出、仏様が喜んでくれる願いをいっぱい持って、歩き出したものである。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十巻一月号

頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年十二月二十日

発行 平成二十六年一月一日

発行人

佐藤良純
大室了皓

編集人

株式会社
シーティーイー

印刷所

株式会社
シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一
東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二二七

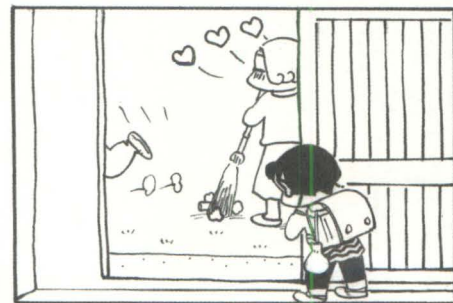
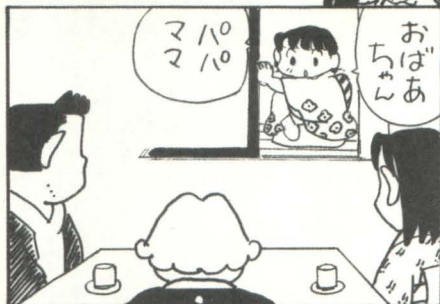
ホームページ <http://jodo.ne.jp>

さっちゃんねネッ

かまち♡ふしろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



泰雲の

文と写真

美味探訪



御前しる粉 680円



浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

甘味処『初音』

東京・人形町

法楽、法楽。

祝意をこめて今年も相変わリませずという気持ちで、新年を迎えることができました。

今回は、新春に相応しい老舗の甘味処『初音』のご紹介です。『初音』の創業は、天保8年と東京で最も古い甘味処で、江戸の芳町風情が残る人形町の甘酒横丁から水天宮交差点の中間に位置しています。人形町周辺はかつて「元吉原」と呼ばれていました。吉原遊郭が江戸の拡大にともない浅草に移転したため、代わって中村座をはじめ歌舞伎の芝居小屋が立ち、今も明治座があるように芝居との縁が強い土地柄です。

そんなところから、店名は歌舞伎由来「義経千本桜の道行初音」からとって「初音」。

寒い季節になると恋しくなるのが、この『初音』のおしる粉です。とくに優しい甘味と滑らかなこし餡に、香ばしく焼かれたお餅が入った「御前しる粉」。

つきあわせの紫蘇の実の塩味もほどよく、おしる粉を引きたてて上品な色合。お餅は毎日杵でつくという、このお店の素材の良さがどのメニューも窺われます。

中央区日本橋人形町1-15-6 五番街ビル1F 03-3666-3082

東京メトロ半蔵門線水天宮駅徒歩1分、日比谷線人形町駅徒歩2分(230m)

営業時間 月～土曜日 11:00～20:00 (LO19:30)

日・祝日 11:00～18:00 (LO17:45)

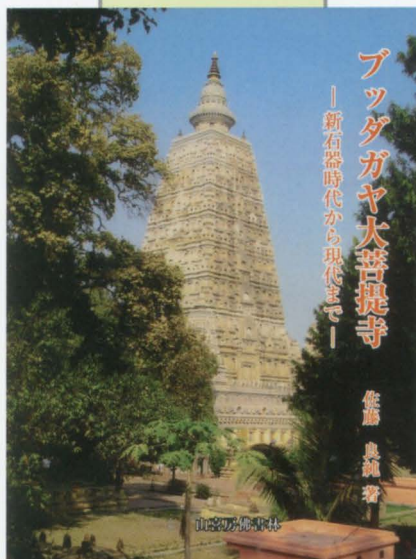
定休日 年末31日・元旦1日

待望の書、刊行なる！

ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著

— 新石器時代から現代まで —



山喜房佛書林
本体2000円